

1990年、当時の経済的背景から「出入国管理及び難民認定法（入管法）」が改正され、日系2世、3世やその家族の就労が合法化されたことにより、外国人労働者が急増しました。

市でも、こうした経過から多くの外国人労働者とその家族が増え続けています。中でも、ブラジル国籍の居住者は、平成2年62人であったのが、現在、2、837人（8月末）となっています。わずか10数年で、45倍の増加となっています。

急増する在住外国人の支援については、さまざまな課題があります。

特に、子どもの教育の問題は、言葉や学校教育制度の違いなどから、重要な課題となっています。

今回は、高校生の田口大輔君が、在住外国人の教育や言葉の問題に取り組んでいる関係者をレポートしてくれました。



田口大輔君（本郷町）
美濃加茂高等学校普通科雪コース2年
平成12年度姉妹都市ダボ市派遣生
現在、美濃加茂国際交流協会ダボ市交流委員



地域の「共生」を考える ①

リビングインみのガキ

△ 古井小学校のミーゴ教室では、来日もない日系ブラジル人の児童らが、日常生活に必要な日本語を学んでいます。

近ごろ、町を歩いていると外国人を見かけることが多くなりました。日本語が堪能な人、会うと気さくにあいさつをする人などさまざまな人がいます。

多くの在住外国人は、馴れない環境の中で、日本の生活にとけ込もうと、一生懸命日本の文化や言葉覚えようとしています。

しかし、私たちはどうでしょう。共に暮らしているにもかかわらず、実は在住外国人について、あまり知りません。

そこで、在住外国人のことを少しでもよく知るために、特集しました。

今回は、自分自身が学生であり、ぜひ同世代の人のお話を伺いたいと考え、「教育」をメインに取材しました。

田口大輔

市民まちづくり推進室では、市民参画の広報編集を目指しています。

これは、市民の皆さん自らが、まちの課題について取材され、広報されることにより、皆でまちづくりを考えようとするものです。

私たちは、大人だけでなく、若い人たちも含め、「世代」を超えた「市民の目線」で、課題を考えていただき、将来の美濃加茂市のまちづくりができればと思います。

その第1弾として、今回高校2年生の田口大輔君が、挑戦してくれました。